

---

# リバースクロス ～Got or Lost....?～

なたでこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リバースクロス 〈Got or Lost・・・?〉

### 【Nコード】

N6614M

### 【作者名】

なたでこ

### 【あらすじ】

人間を超える能力を得たとしたら、あなたはどうか生きていくでしょうか……。

そう遠くない未来の日本。

そこでは、発達した科学文明が生み出した超能力者と人間との戦いが起ころうとしていた。

能力に人生を歪められてなお人間として生きたいと望む主人公・龍介は、暴走する”能力者”たちから人間を守るため、仲間と共に立

ち  
上  
が  
る。

## 第一話 真夜中の戦闘（前書き）

小説書き始めてまもないです。

…文章書くのって難しいですね（汗

## 第一話 真夜中の戦闘

宵闇の中、ふたつの影が対峙していた。

一人は細身で軽い上、刀身が綺麗で真つすぐという高級そうな日本刀を両手で構えた少女。

名は椿美里つばきみさとという。

今宵の半月の光を受けて刀は輝き、顔は若さ故の丸みを帯びた頬に影を落としている。

そしてもう一人は…いや、この場合「一人」という表現はそぐわない。

「ひとつ」の機械。

その無機質な思考を適切に表現したかのような冷酷なフォルム。

プレスされた金属で覆われた胴体から、重火器やらレーザーカッターやら色々な武器が伸びている。

「…スローターボット…」

美里は目の前の物体の事を知っていた。

人を殺す為に作られた戦闘ロボットだ。

慈悲も、悲しみも、怒りすらも。

あらゆる感情を持たずただ「人間の命を奪う」という使命を果たすために、今それはそこに存在していた。

「こんなものを街に放すなんて…」

美里は呟いた。

冷たい怒りを吐きだすようにざらつとした声で、しかし冷静に。

「フイイイイイイイ……」

スローターボットが胴体の中心から気味の悪い音を出し、ガチャガチャと関節のきしむ音を響かせながら胴から伸びた足を動かし始めた。

そして腕に取り付けられたレーザーカッターを頭上にかざしながら美里の方へ近づき、一気に振りおろした。

ガキンッ！

「くっ……」

金属と金属がぶつかる音と同時に、美里の全身に衝撃が走った。

振り下ろされたレーザーカッターを刀で正面から受け止めたのだ。

「たあっ！」

美里は一瞬で身を翻し、刀の大振りでレーザーカッターをなぎ払っ

た。

「フィフィフィッ！」

ギユンギユンギユンギユン…

「！」

寒気がするような音に美里は反射的にスローターボットから飛びのいた。

「フィフィフィ！フィフィフィ！」

スローターボットはレーザーカッターとは別の腕に取り付けられたドリルのような突起を高速回転させ、美里の喉元に狙いをつけようとしていたのだ。

「なめんじゃ…ないわよっ！」

美里は刀の向きをくいと返し、精神を統一した。

全身に力がみなぎってゆく。

「フィ！」

スローターボットが美里に向かって突進を始めた。

今だ！

美里はその場で数歩軽くステップを踏むと、力強く地面を蹴って大

きく跳躍した。

そして走っているスローターボットの丁度背後に落下していく。

計算通り。

「フィ？」

スローターボットの動きが止まる。

そして…

「ひりゅう飛竜”！”

美里は素早く翻り、すさまじい剣速で一気に斬りかかった。

ガシュッ！ガシャーン！

金属が引き裂かれる音を立てて、二つになったスローターボットは無様に地面に転がった。

ピクピクとけいれんのような震えを繰り返しながら、なおも上半身が美里の方へ這いずってきたがやがて動力を失って停止した。

「…ふう」

美里は溜息をついた。

早く戻って、彼らにこのことを報告せねば。



「ついに…戦いの時がきたのかしらね…」

美里は刀をしまい、一人夜の道を歩いて行った。

半月はさきほどまでと変わらぬ明るさで地上を照らしていた。

## 第二話 退屈

「1380円になります」

きむらまさと  
木村誠人は慣れた手つきでレジスターのボタンを叩き、計算の結果を目の前の客に告げる。

「はい。1500円からお預かりします。120円のお釣りになります。ありがとうございました」

客の相手を一通り終えて、誠人は時計の方を見た。

「ふーっ」

そろそろ今日のアルバイトは終わりだ。

誠人は「STAFF ONLY」と書かれた扉を開け、帰り支度をしに中に入った。

「じゃ、これで失礼させていただきます。お疲れ様でした」

誠人は挨拶をして勤め先のコンビニを後にした。

この時間帯、既に通りに人はおらず電球の切れかかった街頭が虚しく点滅しているだけだった。

「……はー……やっぱり夜勤はきついな……」

今日も、何事もなく一日が過ぎた。

「つまんねーな…」

毎日が空疎で面白くもなんともない。

何もせず家でだらだらしているか、アルバイトをしているだけ。

「家さえ出れば、何かが変わると思ってたのに」

これなら、あのまま親の言いなりになって素直に大学へ行っていた方がよかった。

『親の敷いたレールに乗って生きるのが嫌』なんてベタな理由で家から飛び出し早二年。

結局何か打ち込む物を見つけただけでもなく、気が付けば日々の生活をアルバイトで食いつなぐだけのフリーターになり下がっていた。

「あーあ…どこかに人生が変わるような面白い事でも転がってないかな。…ってそんな他力本願になってる時点でダメか」

情けない自分を呪いたくなったその時、誠人は何か変な音を聞いた。

ガキンッ！

「？」

何だいまの。

誠人はいぶかしんで足を止めた。

そして次の瞬間

「なめんじゃ…ないわよっ！」

今度は女の子の怒声が聞こえてきた。

「な…」

なんだなんだ？

何が起きてるのか、非常に気になる。

好奇心を抑えられず、誠人は音のする方向へ歩いていくことにした。

「な…何が起きてるんだ…？」

目の前で、信じられないことが起こっている。

月明かりの中で向き合う二つの影。

一つは剣だか刀だかわからないが細長い刃物のようなものを勇ましく構えて立つ少女。

そしてもう一つは…

「口…ロボットお？」

そうとは思えないようなメカニックな姿で、その物体はそこに立っていた。

手といくか腕のような部分の先ではドリルと思われる物が回転している。

「何かの撮影か…？」

特撮ものの映画でも撮っているのかも知れない。

「いや…今どきそんなベタなオチもないだろう」

大体映画のロケなどを真夜中の街中でやるわけもない。

そう考えていた刹那、影の一つが激しく動いた。

「え、え…え？」

突然少女が上に跳び上がったのだ。

それも信じられないような高さまで、一気に。

そして少女は「ヒリユー！」とかなんとか叫びながら目にも止まらぬ速さで剣を振り、次の瞬間ロボットは胴体の所で一刀両断されていた。

金属どうしがぶつかり、片方が斬り裂かれる嫌な音がした。

「うわ…っ」

本当に斬った。

これが口ケでも何でもなく、本当の戦いである事が証明された。

もしあのロボットが着ぐるみだったなら、あんな風に胴体で真つ二つにできるはずがない。

中の人まで真つ二つになってしまう。

「う…嘘だろ…」

誠人は、いつの間にか自分の膝が震えている事に気が付いた。

刀を持った少女は未だその場に留まり、何かを考えているようだ。

（こ…これって、あの子に見つかったら俺もやばいんじゃないか？）

嫌な予感が胸をよぎる。

（逃げる…逃げる…）

誠人は音を立てないようゆっくりを後ろを向き、来た道に戻っていく。

やがて十分離れた所で、今度は全力でダッシュした。

「はあ…はあ…はあ…」

（何なんだよあれ！？わけわかんねえよ！）

やり場のない疑問を胸の中で叫びながら、誠人は夜の街を疾走して行った。

明るい半月がとてもきれいな、夜の事だった……。

### 第三話 戦いの始まり

朝、静かな家の居間でコンピュータのキーボードを叩く音が耳触りに響いていた。

その音を発しているのは家に一台しかないパソコンの前に座る小柄な少年。

この家の住人の一人である。

「ZZZZZZZ…」

パソコンとは別の方向から、これまた耳触りな寝息が聞こえてくる。

この家の住人第2号。

名はなだきりゅうすけ灘本龍介という。

「おい、龍介」

キーボードを叩く手を止め、少年は龍介の名を呼んだ。

「ZZZZZZZ…」

が、起きない。

「おい龍介、起きろ」

焦れた少年は近くにあったティッシュ箱を手に取り、寝ている龍介



目がけて投げつけた。

「いってえ！」

バコツという音とほぼ同時に、龍介が悲鳴をあげて跳びあがった。

「いってえいってえ。おいベル！今ので脳細胞3000個は減ったぞ！」

龍介はようやく居間のソファから起き上がった。

痛そうに頭を押さえて、ベルと呼んだ少年の方を恨めしげに見る。

一方ベルは冷静なもので、

「お前の脳に3000個も細胞があったとは驚きだな」

「人を単細胞みたいに言うんじゃないよ」

「まあ落ちついてくれ。私とて理由もなく無理にお前を起こした訳ではないからな」

ベルは再びパソコンのモニターに目を戻すと、マウスとキーボードを目にもとまらぬ速さで操り、なにやら難解なプログラムを起動した。

突如出現したウィンドウにX軸・Y軸・Z軸の三軸のグラフが出現し、ベルが情報を打ち込む度に一点の座標が四方八方へ行ったり来たりを繰り返す。

コンピューターが苦手な龍介には、ベルが何をしているのかよくわからない。

龍介はしばらくその様子を眺めたあと、再びベルに詰め寄った。

「で、何だつて俺にティッシュの箱なんか投げつけたんだ」

「それだ龍介。緊急事態なのだ」

「…な、何だよ」

「我が大好物“ミンティー”の買い置きがなくなったのだ。あの爽快な味わいを堪能しない日など、一日でもあつてはならないのに」

「……………」

「冗談だ」

ベルはフツと上品に笑うと、パソコンのモニターを指差した。

「詳細はこれを見てくれればわかると思うが…」

「わかりません」

「そつえばお前はコンピューターが駄目だったな。これは私が独自に編み出した計算方法で、既存の情報から未来に起きる事象を予測した結果なのだ」

「胡散臭いな」

「黙れ。私は天才だぞ?」

龍介の発言を一蹴すると、ベルはごくりと喉を鳴らしてから言った。

「…まずいぞ龍介。近いうちに“新逆十字軍”しんぎゃくじゆうぐんが活動を開始する可能性74.5%だ」

「新逆十字軍…」

「まさか、忘れてはいないだろう」

「そりゃあ、いきなりボイスチェンジャーの声でテロに誘われたら忘れられねえ思い出にもなるさ」

新逆十字軍というのは、世の中の革命と称してクーデターを起こそうとしているテロリスト…と言ったところだろうか。

しかし、武器で武装して破壊活動をしたり、民間人を虐殺するただのテロリストとは少し違う。

戦力の質が違う。と言えいいのだろうか。

そこそこの数さえいればそらのテロリストなど比較にならないほど厄介な敵になるだろう事は間違いない。

そのメンバーは全員、ある一つの因縁で繋がっている人間で占めているらしい事を龍介達は知っている。

何故そんなことがわかるかと言えば、龍介も逆十字軍代表たる“救世主”から誘いの連絡を受けているからなのだが…

「ついに“救世主”が動けるだけのメンバーを集めたって事か」

「お前には、あれから“救世主”の連絡は来ないのか？」

「ああ、全然来やしねえ。『革命なんて興味ねえよ』ってはっきり言っただけだから向こうもあきらめたんじゃないかねえか？」

そう。龍介は“救世主”の誘いを断った。いや、撥ねつけたのだ。その事実を知っているベルはただニヤリと笑った。

「冗談じゃねえっつーの。なんで今現在こうして普通に生活できてるのに、革命の真似事なんか協力しなきゃなんねえんだよ」

「その台詞…ヤツの誘いを断った日にも同じことを言っていたな。龍介」

今度は龍介が笑った。

「そういえば…昨日の美里の話、確認取れたか？」

「ああ。間違いない」

ベルはグラフの画面を閉じると、次は何かの画像を全画面表示で開いた。

それは昨夜、この家のもう一人の同居人…椿美里が戦闘になったと言うロボットの写真だった。

当の美里は、戦闘の疲れなのかまだ部屋から起きてこない。

「スローターボット…おそらく、旧逆十字軍のメカニックを担当していた“ルル”の作だろう」

「ルルは今も独房にぶち込まれたままなんだろう？」

「多分、誰かが残っていた設計図をもとにまた生産を始めたのだな」

「新しいメカニックを引きこんだか」

「おそらくは。もしくは、“救世主”自身が組み立てたのかも知れんが」

ベルは数秒、考えるように目を閉じた。

一緒に生活している龍介や美里からすれば既にお馴染みの光景だが、ベルは何かを考える時、いつも目を閉じて外界からの情報を遮断する。

しばらくして、ようやくベルが口を開いた。

「……………龍介」

「何だ？」

「テロへの参加をきっぱり断ったのは正しいと思う。今の平和な生活を捨てて戦いの歴史を繰り返すのは、10年前のあの日、自らを犠牲にしてまでお前を守ったお前の父親の想いを無にする事だ。」

「親父：か。まあ、確かにそうだな」

「彼が残した“手記”を呼んだのだろうか？」

何も言わずに去ってしまった龍介の父が家に残した手記：正確に言うところ龍介へのメッセージが発見されたのは、つい数年前の事。

「ああ。お陰でこの国がどんなに嘘つきで親父がどんなに哀れな奴かが良く分かったよ」

10年前：日本国民全ての記憶に焼き付いて離れない史上最大の凶悪事件が、東京を舞台に起こった。

しかし、その事件について大多数の国民が教えられた内容は、現実とは大分違った物になっている。

その内容では、主犯は勤め先を解雇された怒りから犯行を計画し、罪のない人々を大量に殺傷した非情な凶悪犯と言われている。

その凶悪事件の裏には、もっと複雑な事情ややむにやまれぬ動機があった事を、殆どの人々は知らないのだ。

そしてその事件に、灘本龍介の父、灘本啓介という人物が深く関わっていた事も…。

「だからといって、この国を転覆させようとかそういう事は考えないけどな」

それでは、国が父とその仲間達にした仕打ちと何一つ変わらない。

「それが正しいだろう。父親のためにも、お前はこんな事に参加するべきじゃない。…が」

「が？」

「拒否するからにはこちらも色々と覚悟を決めねばならん。実際に昨夜は美里がスローターボットに襲撃されたんだ」

「協力しないなら排除される…ってことが」

「そうだろう。…無論、黙ってやられてやる気なんてないだろう？」

しばし黙考したのち、龍介は肯いた。

「当然だ。向こうが俺達を殺そうとするならこちらも防衛を図らないとな」

そう言うつと龍介はベルの目の前で腕に力を入れてみせた。

するとベルは関心した声をあげた。

「すごいな…。まだ“能力”は健在だったか」

「でも、腕がなまってるかも知れん。ちよつくら稽古してくる。…

……本当はこんな力、二度と使いたくないと思っていたがな」

その表情に暗い影を落として、龍介はつぶやいた。

「……………」

うつすら本音を覗かせた龍介に、ベルはかける言葉が見つからなかった。

自分が自分である事に苦しむ気持ち…ベルにとっても決して人ごとではなかったからだ。

「気をつけるよ…。お前が本気を出すと家が危ないからな」

しばらくして、ベルは重い口を開いた。

それでも、戦わなくてはならないんだ。

悪いのは私たちではない。戦いを仕掛けてくる輩なのだ…と、目で言い聞かせながら。

それを察したのか、龍介の表情は次第にいつもの柔和さと力強さを取り戻していった。

「わかったよ。ああ、ところでミンティーなら戸だなの上に新しいの置いといたぞ」

「悪いが、取って来てもらえないか？私の身長では手が届かないんだ…」

「…さて、稽古してくるか」

「ああ。もう駄目だ。私はミンティーを少なくとも一日ひと箱食べないと禁断症状だとえ戦いの間でも武器のメンテナンスどころじゃなくなるんだ」



「なんだそのトンデモ設定は」

突っ込みながら龍介はベルの身体を見た。

身長は140cm程しかなく、体重も30kgだ。

どう見ても小学校低学年にしか見えない。

「お前何歳だっけ」

「うるさい。今年で15だ。育たない物はどうしようもないだろう。天は二物を与えないという事だ。お前がその身体の代わりに残念な脳味噌しか持っていないようにな」

こうムキになって言い返すあたり、中身の方もあまり成長していないのかも知れない。

「はいはい。取ってきてやるから安心しろよ」

「あと、そろそろ美里を起こした方がいいんじゃないか？彼女がいないと朝ごはんが食べられない」

「俺はパシリかよ…」

文句を言いながら、龍介は居間を後にした。

## 第四話 虚しい日々 to 別れを告げて

「…」

朝、誠人は安アパートの自室で一人ぼーっと考え事をしていた。

（それにしても、何だったんだ？ あれは…）

どう見ても本物にしか見えないロボット。

そして街中で刀を振り回す謎の少女。

夜の街を舞台に繰り広げられた激しい攻防。

全く普通ではない事が、昨夜実際に目の前で起きた。

夕チの悪い夢だったのではないかと疑ったが、次の日の朝になっても夢が覚める気配がない事を考えると、その可能性は捨てざるを得なかった。

（本当に、何だったんだろう）

その事が気になるあまり、昨夜はついに一睡もする事ができなかった。

窓の外はもう完全に明るくなり、かすかに鳥のさえずる声が聞こえている。

（こんな事なら、あの時あの子に話しかけて聞いてみればよかった

…)

聞いてみた所で、彼女が親切に事情を説明してくれたかと言えばそこは微妙である。

それでも、ダッシュで逃げて後で疑問を残すくらいなら聞くだけでも聞いておけば良かったと、今にして誠人は思った。

「……………」

(俺って…こんな事ばっかだなあ…)

思えばいつもそうだった。

誰かに言われた事をこなすだけ、自分からは何一つ動こうとしない。親に言われるまま偏差値の高い高校に入り、そして親に言われるまま世間的には名門と言われる大学へ進もうとしていた。

そんな自分に嫌気がさして、せつかく現役合格した第一志望大学も捨て、家を飛び出した時思った。

これできつと何かが変わる。変わるはずだと。

でもそれは間違いだった。

誰の命令からも解放された時、誠人はやっと気づいたのだ。

自由になった所で、自分にはやりたい事など一つもなかった。

自分が何をしたいのか、何をできるのかなんて一度も考えた事がなかったのだと。

（目的もなしに勉強だけやってきたなんて、笑っちゃうよな）

家を出てから、誠人は両親と一度も連絡を取っていない。

それもそのはず。家出しておいて目標もなく、ただのフリーターの身に落ちたなんて言えるはずがない。

何より、こんな情けない自分を両親にだけは見られなくなかった。

（はあ……。どうすりゃいいんだろうな、俺）

不意に、昨夜目撃した戦闘の映像が脳裏をよぎった。

（……………できる事なら、あの子と会って話をしてみたい。あのロボットが何なのか、なぜ戦わなければならなかったのか聞いてみたい）  
いや、よくよく考えてみたら今からでも遅くないのではないだろうか。

『できる事なら』ではない。できるはずだ。

あの辺の区域で女の子一人探すくらい十分可能ではないか。

誠人は立ち上がった。

シリアスな考え事に冷えきった全身に、熱い物が流れ行き渡っていく。

さきほどのネガティブな心情から一転、今の誠人の心にはやる気がわきおこっていた。

興味本位と思われるかも知れない。

迷惑がられるかもしれない。

それでも、とりあえず誠人は何かを始めたかった。

自分の意思で行動を起こしてみたいという欲求に駆られていたのだ。

誠人は部屋の壁に架かったカレンダーに目を遣った。

「今日は、バイトが休みだったな……」

誠人はまず身支度をする為、洗面所の方へと歩いていった。

まずは、やれる所までやってみようじゃないか。

未知の世界をこれから明らかにしていく事を思い、誠人は期待に胸を膨らませていた。

## 第五話 宣戦布告

『機密保持・国土防衛局』局長室は、常に異様な静けさに支配されている。

自衛隊の予備組織として極秘裏に組織された“裏の省庁”として長い間存在を続けてきたこの防衛局。

表向きには公表されておらず、予算も有事の時以外はギリギリ組織を維持できる金額のみというおそらく世界一お寒い防衛局だ。

数年前その局長に就任した中年の男は、あってもなくてもいいような気だるい事務仕事で日々の時間を潰す生活が続けていた。

全身から発せられる暗いオーラ故か、はたまた目が合った人を委縮させる強い眼光故か、周囲の人間は皆彼を避けていた。

今日も一人で革張りの高級な椅子に腰かけ、目の前の書類にハンコを押したりするだけの静かな一日だと思われていた。

少なくとも今から10分前までは。

「・・・・」

部屋の主、真野孝造<sup>まのこうぞう</sup>はある一枚のカードを前に固まっていた。

朝、出勤してきた真野は執務室の郵便受けに珍しく茶封筒の郵便物が届いているのを発見した。

中身は一枚のカードで、真野にあててのメッセージが綴ってあった。書き出しは『機密保持・国土防衛局局長、真野孝造さまへ。新逆十字軍代表、“救世主”から。』

真野は茫然となった。

というのも、彼は旧逆十字軍の事を知る、数少ない日本人の一人だからである。

しかも、存在自体が極秘とされているこの局を知っている人物……ただ者ではない。

真野は椅子から立ち上がったままカードに顔を近づけ、書かれた一字一句を見逃さぬよう集中して読み始めた。

やがて読み終え、真野はドサリと椅子に沈みこんだ。

心拍数が急激に上昇していくのが自分でもわかった。

「逆十字軍……だと!？」

気が付けば、真野は拳を握りしめ今にも机に叩きつけようとしていた。

手紙の内容は、“救世主”を名乗る人物……新逆十字軍代表からの宣戦布告だった。

『……このような動機から、勝手ながら日本国に革命を起こしたいと思ひ至り、“第二次東京戦”<sup>だいにじとうきょうせん</sup>の幕開けを決意致した次第であります。

」

『しかし、当然ながら我々の闘争が慎重な手続きを経て出来うる限りの公平な戦いを目指さない限り、それは革命にはならずただのテロリズムとして時代に埋まり風化して行くのが関の山だと考えております』

『では、より公平な戦いとは何か？それを考えた結果私どもはお互いを知り、自分自身を知らせた上で本番の戦いに臨めば公平性が増すという結論に至り、まず“小手調べ”をする事に致しました』

『小手調べの内容ですが、私どもは都内の大型ショッピングモール“Amber Ruby”をあらゆる手段で必ず木端微塵に破壊してご覧に入れます。』

『もちろん、あなた方はあらゆる手段で私達を阻止して頂いてまったく構いません。しかし、あなた方がどんな手段を講じようとも私どもの計画に支障は出ないという事はあらかじめ申し上げておきます』

『それでは決行日時をお伝えします。決行は…』

「……………」

カードに書かれた決行日時までは、あと3日ほどしかなかった。

この防衛局が最後に機能したのは今から10年前、“東京戦”の時だった。

たった3日で10年のブランクを取り戻し、防衛任務にあたれるか



と言ったら難しい。

それでも真野の心には、必ず奴らの計画を阻止してやるという思いが熱く燃えていた。

「逆十字軍…今度こそ…私は…」

真野は机の引き出しを開き、小さな額に入った一枚の写真を取り出した。

まだ真野の髪が真っ黒だった頃、最愛の人と娘と3人で撮った写真。

しかしその中で自分以外は、既にこの世を去っていた。

「明美<sup>あけみ</sup>…里香<sup>りか</sup>…どうやら、これは私に与えられたチャンスのようだ」

10年前、“東京戦”に巻き込まれて死亡した妻と娘。

その仇を討つチャンス、そしてあの時守ってやれなかった償いをするチャンスが、突如真野に与えられたのだ。

「逆十字軍…今度こそ、この私が皆殺しにしてくれる！」

昂る感情にまかせて、真野は力強く吼えた。

戦いの時は、もはや目前まで迫ってきていた

## 第六話 迷い

夕刻、歩道に二つの長い影が伸びていた。

既に空は紅く染まり、カラスの鳴く声が幻想的に響いている。

「…重いんですけど」

龍介は先ほどから自分の右肩を圧迫している買い物袋を指差し、傍らを歩くもう一人に文句を言った。

「我慢なさいよ。このために付いてきてもらっただから」

文句の矛先を向けられた少女、美里が龍介に言い返す。

「お前も少しくらい持つべきだと思うな」

夕飯の買い物をした帰り、龍介は全ての荷物を持たされていた。

「あんた男でしょ。それに、“ただの人間じゃない” んだから」

「お前こそ剣道やってたくせに…まあいいけど」

折れた。

こんな風に言い合うも結局は龍介が折れる、それがこの二人の間の常だった。

大雑把だが基本的に穏やかな性格の龍介と、活発で勝気な美里。

何だかんだで相性のいい二人は、些細な言い合いはしても大喧嘩に発展する事はそうそうなかった。

一瞬間を空けて、龍介が口を開いた。

「…しかし、こうやってスーパーで買い物したりとか…普通の生活ができるのもあと少しかもな」

“救世主”の活動開始。

逆十字軍メカニック・“ルル”設計のスローターボットによる襲撃。

何か不穏な事が起ころうとしている事はもはや明白だった。

「ほんとに。この前スローターボットに追いかけられた時なんか、死ぬかと思ったわよ」

実際、刀を持っていなかったら危なかっただろう。

「確実に新逆十字軍が迫ってきている…か」

「ねえ、龍介」

美里が立ち止まった。

龍介もその場で止まって聞き返す。

「何だよ」

視線がぶつかるが、気にせず美里は続ける。

「前から気になっていた事があるんだけど…怒ってもいいから」

美里は険しい表情で問いかけた。

「あんたは…入らないの？新逆十字軍に」

「え…？」

「あなたのお父さんは10年前逆さ十字の旗を掲げて…散ったのよ」

一呼吸置いて、美里はさらに言葉を継いだ。

「仇を討ちたい…そういう気持ちは本当じゃないの？」

「……………」

龍介は黙り込んだ。

「そりゃ、どうしようと龍介の勝手だし龍介の考えも何となくわかるけど…本当にそれでいいの？」

「いいんだよ」

きつぱりと、尾を引いた迷いを完全に断つように龍介は言った。

「俺は親父が残した“手記”を読んだ。親父は初めから戦況が不利になったらすぐ司法取引を結んで降伏するつもりでいたらしい。『逆十字軍が降伏する代わりに、メンバーおよびリーダーの家族安全

には危害を加えない』って取引を。親同様“能力”を持っている俺達は、そのままなら下手すれば当局に消されてた可能性もあったんだ」

「龍介…」

「親父…逆十字軍のメンバーは自分達の戦いを犠牲にして俺みたいな子孫に平和な未来を与えてくれたんだぞ？それを無駄にするような事はできないだろう」

「それはわかってる。でも、新逆十字軍に参加しなければ今度は彼らと戦う事になるし…」

「それでも、俺は関係の無い人間を傷つけたりするのは嫌だし、出来る事なら人間を守りたい」

人間を守りたい

突如、龍介の口から出てきた言葉。

大雑把おおざっぱで適当な性格の龍介が発した明白な淀みよどの無い言葉に、美里は驚きを隠せなかった。

「人間を…守る…？」

「東京戦が起きる前、親父たちは当局の人間に怪物と罵られ追われてたらしい。そして東京戦は起きた。親父たちは人間の敵になり、本当の怪物になっちまったんだ。でも、俺達は何者なのかは他人が決める事じゃない。俺達自身が決める事ができるんだから」

「……………」

「人間として生きたいと望むならそう生きる事が俺達にはできる。俺はそう思ってるんだよ」

美里はそれ以上何も言う事ができなかった。

自分の考えをととうと述べる龍介に、とてつもなく強いエネルギーを感じたからだ。

それは覚悟を決めた龍介自身が発するオーラなのかもしれないし、牙を剥くのを今かいまかと待ちわびる“能力”の息吹かもしれない。なかった。

心なしに龍介の身体全体がかすかに青く光っているように見えた。

（初めて会った時と…同じ…）

絶望の沼に沈もうとしていた自分を救ってくれたあの時と同じエネルギー！。

寒気がするような畏怖を覚え、美里は目をそらした。

「帰ろう」

少し不機嫌そうにぼそつと言うと、返事を待たずに龍介は歩きだした。

後を追って美里も歩きだす。

「龍介はさ、何て言うか…とにかく大人だよな」

「何だよそれ」

「ん。なんでもない。わたしは龍介みたいに強くなれないうて。そう思っただけ」

「……………」

龍介は何も答えずに歩き続けた。

しばらく無言で歩き続けたのち、沈黙を破ったのは龍介だった。

「強くなんて…ない」

「？」

「俺さ…本当は怖いんだよ」

「何がよ」

「俺は親父の事をあまり知らないし、あの手記も全て鵜呑みにしていいのが正直よくわかんないし。親父が、俺の思っているような人じゃない可能性も十分あるだろ」

「そりゃまあ…そうだけど」

「そもそもさ、何で沢山の人を犠牲にしてまでクーデターみたいな事をやらかしたんだろうとか、他に方法はなかったのかとか…考えてみると疑問は尽きない」

「信じてるの？それとも、疑っているの？お父さんを」

「わからない。でも、一つはつきりしているのはこの“能力”が人の身体だけじゃなくて心まで怪物に変えるだけの力を持っているって事。でも、それでも…」

龍介は一瞬考えてから、再び口を開いた。

「たとえ親父がどんな人間だったとしたって、やっぱり俺は革命なんかに参加する気になれない」

「そう……そう……だよな」

美里は不安定な目つきで遠くの景色を見つめながら、呟いた。

「…ねえ龍介。人間であることって、そんなに大事なのかな」

「……………」

「人間って、うわべは潔癖に振る舞ってても心の中では汚い事考えてたりするし、平気で他人を傷つけたり…」

そこで美里は声を詰まらせ、次の瞬間感情が溢れだすように言葉を吐きだし始めた。

「…わたしの両親だって…死んじやったじゃない！人間に殺されて！人間が！わたしの…！」

「美里…」



龍介は美里の肩を掴み、自分の方を向かせた。

じつと美里の瞳に焦点を合わせる。

しばらく興奮状態で息を上がらせていた美里は、やがてうなだれたようにがっくりと肩を落とした。

「……………ごめん。わたし…また」

「…いや、いいんだ。簡単に忘れられる事でもないしな」

「…ごめん」

「もういいって。ほら、早く帰らないとミンティー不足でベルが飢死しちゃうぞ」

言いつと龍介は小走りに家へのルートを進み始めた。

美里にはその姿が、それ以上の議論を拒絶しているように見えた。

（龍介も、迷ってるんだ…）

わたしだって、迷ってる。

いったいどうすればいいんだろう。

あの日、初めて龍介と出会った日。龍介は言った。

『君みたいな人間を探してた。一緒に…世界を守ってくれないか？』

初めは、頭がおかしいのかと思った。

でもその後、ベルと出会って…色々な話を聞かされて…本当に世界が危機に瀕している事を知った。

日本だけではない。新逆十字軍が狙っているのは世界だとベルは言っていた。

それなのに。

わたしにはそれを止める力があるのに。

どうして今になって、まだ迷ってるんだろう。

「待ってよ龍介！」

美里は龍介の後を追って走り出した。

そうだ。迷ってる暇なんてない。

明日にも新逆十字軍が攻めて来るかもしれないのに。

「？」

美里は立ち止まった。

行く手をふさぐ、一人の男。

見覚えのない顔だ。

ちゃんとした服装をしているが、長年しまいこまれていたような臭いが鼻をついた。

咄嗟に美里の脳裏によぎったのは新逆十字軍の名前だった。

「っ！」

美里は龍介の姿を探した。

龍介は男の存在に気付く事もなく、遙か前方を走っていた。

美里は男に向き直った。

あいにく  
生憎今日は刀を持っていない。

「……………わたしに何か御用ですか？」

「…君、もしかしてこの前ロボットを倒した子？」

「え……？」

## 第七話 救世主

『決行が明日に迫りました。計画に変更などはございませんか？』

若い男の声がスピーカーから響く。

“救世主”は簡素な椅子に浅く腰かけた状態で、盗聴防止装置とボイスチェンジャを取り付けた携帯電話端末を手に取り応答した。

「…計画に変更はない。先日打ち合わせた通りに動いてくれたまえ」

『了解しました』

ぶつりと、通話を終了する音が聞こえた。

“救世主”は端末を机の上に置くと、椅子に深く座りなおした。

いよいよ明日、革命の前哨戦ぜんしゅうせんが始まる。

防衛局、自衛隊、警察…

関係各所の人間がどれほどの抵抗を見せてくれるか…“救世主”は不的な笑みを浮かべた。

ここは数ある新逆十字軍の支援組織からの出資で建設した地下施設の一室。

壁はコンクリートむき出し。施設じゅうに土の匂いが充満している。

正直快適に過ごせる場所ではなかった。

しかし、これはこれでいい。

現状に満足しない事でより貪欲になり、欲しい物を得るために力を持つことができるのだから。

いずれ胸を張って地上へ出て行くことを思えば、土の匂いに包まれて生活するくらいどうという事もない。

「……………」

しかし、一つだけ懸念材料があつた。

旧逆十字軍の子孫が皆この闘争に参加する意思を示した中、一人だけ参加を拒否した男。

「灘本…龍介…」

奴の情報なら全て頭に叩き込んである。

現在17歳。

身長176cm 体重68kg

父親は旧逆十字軍リーダー・灘本啓介。

近い身寄りはおらず、資産家の遠い親戚からの仕送りで生活している。

15歳の時、父親が持っていたものとはほぼ同じ種類の“能力”を覚醒させる。

その後、同じく“能力”を持ち東京戦の事情を知る少年・ベルと出会い、以来新たな反乱の動きを監視するようになる。

16歳の時、両親を通り魔に殺された少女・椿美里と出会い、ベル・美里との3人で生活をするようになり、今に至る。

「仲間がいるのが厄介だな…」

能力者が二人いるのに加え、美里という少女も能力者でこそないものの剣に関してはかなりの使い手だという事。

先日送ってやったスローターボットもこの美里という少女が破壊したらしい。

「放っておけば…計画に支障がでるかも知れん…な」

“救世主”は携帯端末を再び手に取ると、さきほどの男に連絡を取った。

『はい』

「計画に変更はないが、一つ念頭に置いてほしい事がある」

『何でしょうか?』

「先日も話した灘本という青年：奴は基本複数で行動している。そのうち二人は能力者だ。奴らの妨害が入る可能性があるから当日シヨッピングモール内で発見したら即刻始末してくれたまえ」

どうせ大騒ぎになるのだ。その時に乗じて始末できれば一番都合がいい。

『能力者…ですか』

「ああ。どちらも最強クラスの能力を備える大物だ」

『しかし、計画を滞りなく進めるためにもあまりそちらに人員を割くわけにはいかないのですが…』

「奴らは少人数ゆえ、きっと単独行動に移るだろう。その時をねらって一人ずつ叩きたまえ」

『了解しました』

通話が終了した。

「……………」

負けるものか。

“救世主”は拳を握った。

みるみる内に拳が、腕が、そして全身が青く光りだす。

長い潜伏の時を経て、“救世主”の“能力”は衰えるところかます

ますそのエネルギーを増していた。

きつと、革命は成功する。

そしてゆくゆくは…世界の全てを我々が手に入れるのだ！

“救世主”は唇を薄く舐めると、薄く笑った。

「ククク…ケケケケケケ…」

この、恥辱の10年間。

人生最悪だったこの時間を、もうすぐ終わらせてくれよう。

「勝利してみせる…！」

勝利して見せるぞ。

…今度こそ。



## 第八話 招かれざる客

「…で、なんでここまで連れて来たのかな」

ベルが背中を掻きながら不機嫌そうに言った。

「しょ、しょうがないでしょー！何度言っても帰らないんだから！」

同じく不機嫌そうに、美里が言い返した。

龍介、ベル、美里の住まい。住宅街のただ中にある小さな一軒家。

その居間に招かれざる客・木村誠人が、3人の住人に囲まれて正座していた。

「まったく。目の錯覚か何かじゃないのか？この女はかなりの運動音痴で、刀なんか振り回そうもんなら自分が刀に振り回されてもおかしくねえぜ」

龍介はうんざりだといった調子で嘘八百を並べた。

「そ、そんな筈ないです。確かにあの人の顔でした」

誠人は次第に陰悪になっていく場の空気に内心おびえながらも、精一杯自分の主張を押し通そうとしていた。

「あー…本当にもう…」

やり玉に挙げられている美里も、もはやイライラを隠していなかった。

た。

事の起こりは夕飯の買い物をした帰り。

家路についた美里を突然現れた若い男性が呼び止めた。

彼が言うには、先日の美里とスローターボットの戦闘を見ていたらしい。

人違いだと散々言ってもしつこく付きまとうので、つい家まで上げてしまったのだが…。

「確かに戦ってる所を見たんです。なんですよあのロボットは？僕はもうあれが気になって夜も眠れ…」

ついに我慢の限界が来たのか、龍介が声を荒げた。

「いい加減にしろ！とつとと帰らないと警察を呼ぶぞ！」

怒鳴られた誠人は一瞬ひるんだが、すぐケロッと立ち直ると、

「そんなの呼んだらまずいんじゃないですか…？本物の刀を所持して夜な夜な振り回してるなんて、立派な銃刀法違反ですよねえ…？」

と切り返した。

「ぐ…！」

「本当の事を話してもらえないと…警察の方に調べてもらっちゃう  
かもしれませんよお？」

「……………」

言葉に詰まる龍介。脇のベルも両手を広げて首を横に振っている。

「話して、もらえますね？」

勝ちを確信した誠人は、満面に笑みを浮かべて言った。

「……………参ったね」

龍介が頭を押さえながら投げやりに言った。

「……………ごめん。私のせいだ……………」

美里が申し訳なさそうに俯く。

「いや、あの夜は突然襲われたわけだし美里は悪くないだろう。ど  
う考えても不可抗力だ」

ベルが冷静にフォローする。

「まあいいではないか。新聞屋には見えないし、実際に見せてやれ  
ば」

「それもそうかねえ……………」

「何を見せて下さるんです？あなたは…お二人のお子さんですか？」

刹那、小柄なベルはギョロリと目を剥き下から誠人を睨みつけた。

「次そのような事をほざいたら、殺す。覚えておくがいい」

「す、すみません」

誠人は突如変わった室内の雰囲気を感じに察知し、少し恐縮した。

ベルは起動状態のパソコンの前に座ると、いつものプログラムを開いた。

「これは私が作成したプログラムだね…」

「はあ」

「ふむ…」

ベルは誠人の身体を隅々まで観察した後、猛烈な勢いでキーボードを叩き始めた。

「君…誠人君。自分の出生時体重を覚えているか？」

「え？一応、覚えてますけど…」

ベルは中指で軽快にエンターキーを叩いた。

画面に3軸の立体グラフが現れ、その形状をせわしく変化させる。

やがてグラフの変動が収まり、一つの座標が定まった。

「出た。君の出生時体重…3250グラムだった可能性93.2%」

「え…？」

「当たっていたかな…？」

「さ、3250.4グラムです…」

「ふむ。小数点以下も当てられるよう改良しておく必要があるな。  
…他にも見せてやろう」

ベルはメモ用紙を一枚ちぎると、誠人に手渡した。

「適当な10桁の数字を二つ書いてくれ」

「は、はい…」

言われるままに誠人は数字を書き連ねていく。

書き終えた誠人はベルに紙を手渡した。

「ふむ…」

一瞬二つの数字を見比べたのち、ベルははっきりと告げた。

「36028453447357870128だ」

「へ？」

「3 9 4 8 1 4 9 7 3 4 × 9 1 2 5 4 0 1 9 9 2 = 3 6 0 2 8 4 5  
3 4 4 7 3 5 7 8 7 0 1 2 8。何なら電卓でも確かめてみる」

「あーっと…」

「ほらよ」

龍介が近くにあつた計算機を放った。

それを受け取ると、誠人は恐る恐る電卓のキーをプッシュした。

「あ…合ってる…」

「わかってくれたかな」

ベルはフツと笑った。

誠人は驚愕の面持ちでベルを見つめた。

「あ…あなたは…天才ですか？」

「天才？いや違うな………“能力者”だ」

「“能力者”？」

「ある日を境にして私の脳細胞は爆発的な進化を遂げた。染色体内  
部の遺伝子情報が書き換えられ、常人には到底不可能な高度の思考  
が可能となったのだ」

「い、遺伝子情報？何を言ってるんですあなたは」

「君は知っているかな？ “東京戦”を…」

「東京戦…！」

誠人の表情が変わった。

「し、知らない筈がないです！ たった3日間にして都内の主要都市が壊滅、大勢の死傷者を出した戦後最悪の軍事クーデターでしょう！？」

「そう。そこまでが一般公開されている東京戦の歴史。君達一般人に与えられた限られた情報だ」

「限られた…？」

「君達は知らないだろう。当時“逆十字軍”と呼ばれたテロリストのメンバーにも、10桁×10桁の計算が一瞬でできる者がいた」

「……」

「50キロ先を肉眼で見通す狙撃主もいたし、そう…中には…」

ベルはちらと龍介の方を見てから、言った。

「中には、大型バスを素手で投げ飛ばす怪力かいりきの持ち主もいたそうだ」

「そ…そんな馬鹿な」

信じられないといった態度で首を振っている誠人。

「皆、同じきっかけで細胞の遺伝子情報を書き換えられた者達だ」

一方、淡々と語るベルはいたって冷静だった。

「いまから18年前。国内のとある核施設で重大な事故が起こった。爆風は山の木々を根こそぎ吹き飛ばし、熱線が民家を焼いた。静かな山村は焼け野原と化し、住民の生存はほぼ絶望的と思われた」

「待つて下さいよ！そんな大事故、ふつうニュースになるし新聞にも載るでしょう！」

「：大人の事情だよ。誠人君。日本の行政は情報のもみ消しが大の得意だからねえ」

「そんな…」

「続けるぞ。：しかしそのような状況の中、火の海から這い出てきた生還者がいた…わからないか？」

「何がです」

「核施設の事故・生還者・遺伝子情報改変…これらのキーワードから導き出される答えは？」

「……………」

「あの日…18年前の事故…辺りに漏れ出した当時研究中だった特殊放射線しゅほうしゃせんによって、何人もの“能力者”が生まれた」



ベルは誠人を酷薄な目つきでねめつけると、笑った。

「私から教えてやれるのは、そこまでだ」

「わ…わけがわからない…そんな馬鹿な話…」

「もう一度10桁計算を見せてやろうか？」

「う…」

誠人は後ずさり、身を翻して玄関の方へ駆けて行った。

「し、失礼しましたあっ」

ボタンと言うドアの開閉音が響き、居間に静寂が訪れた。

「…ずいぶんとぺらぺらしゃべっちゃまったじゃねーか。あれでよかったのか？」

ずっと黙って見ていた龍介がベルに聞いた。

当のベルは一人ニヤニヤしながら思索にふけっているようだった。

「木村誠人…再び遭遇する確率…96.7%……………」

## 第九話 戦闘態勢

某日早朝、機密保持・防衛局局長は都内有数の規模を誇る大型ショッピングモール“Amber Ruby”の前にいた。

そろそろ季節は秋にさしかかろうとしており、朝の冷気は特殊防護服で武装した真野の身体にも多少の冷感を与えていた。

真野はこのような寒い朝をなにより嫌う。

必ずと言っていいほど、楽しかった夢が覚めた後のような虚脱感…  
また同様の孤独感を味わわされる事になるからだ。

しかし、それももうすぐ終わりだと真野は自分に言い聞かせる。

10年前、愛する妻と娘を殺した憎きテロリストどもに目に物を見せてやるチャンスが到来したのだから。

「局長！」

迷彩服を着た若い男が、真野の方へ駆けしてきた。

「君か。陸自からの派遣部隊の隊長というのは」

「はい！」

初めて目にする『裏の防衛省』すなわち防衛局のトップを前にして、若い隊長は緊張しているのか表情をこわばらせていた。

「準備は、万端か？」

「は、はい。既に自衛隊から派遣された全ての部隊の武装・配備が完了しております！」

「御苦労さまだった。後は時間まで待機していてくれ」

「はっ！」

隊長は去って行った。

真野は隊長の姿が見えなくなったのを確認すると、近くの縁石に座りこんだ。

「ふう…」

昔からバイタリティには自信のあった真野だが、さすがに身体が疲労を覚えていた。

「しかし…何とか集まってくれたな」

3日前、“救世主”からの手紙を呼んですぐ、真野は関係各所に協力を呼びかけた。

警察、機動隊、そして自衛隊…

いずれも真野の名前を聞いた瞬間、即決で要請を受け入れてくれた。

防衛局…正式名称『機密保持・防衛局』には、有事の際閣議決定な  
どあらゆる手続きを待たずに独断で超法規的ちようほうきてきな措置をとる権利が認

められている。

これは防衛局の発足当時からずっと表ざたにならず、変更もされていないルールなのだが、今回の作戦準備を円滑に進める上で大きな助けとなってくれた。

しかし、気がかりもあった。

「さすがに無理があるとは思ったが…」

海外のさる組織に注文した武器がまだ届かない。

防衛局はあらゆる超法規的措施を他のどの機関の許可も得ずに実行に移す事ができる。

つまり、日本の自衛隊や機動隊が通常使う事を許されない強力な武器や国際条約で禁じられた武器も防衛局の権限において密輸入する事が可能なのだ。

もともと、国際条約違反が発覚すれば国外からの痛烈な批判は免れ得ないが、まぬか

今回は、国家予算を使い海外の密売組織に対して相場の10倍以上の金を積んで当日までの到着を約束させたのだが、さすがにこの短期間では無理があったのか、まだ武器が到着していない。

「ふむ…」

まあ、それをあてにしなくとも奴らに対抗できるだけの戦力は既にそろっている。

「いかに怪物といえど、明らかな数的不利の前には黙って膝を屈するよりあるまい…」

真野は、この国で“能力者”の存在を知る数少ない人間の一人だった。

ある光景が真野の脳裏をよぎる。

10年前の東京戦で見た光景。

10年間、真野の脳裏にこびりついて離れない光景。

男が、大型バスを片手で投げている。

大きな鎌かまのような武器を振り、あらゆる物を砕き、切り裂き、バラバラに破壊していく…。

「……………」

真野は立ち上がった。

そしてショッピングモールの建物へと歩み寄ると、コンクリートの外壁に固く握った拳を叩きつけた。

「くっ…！」

低く鈍い音がして、真野の拳に痛みが走る。

真野は歯を食いしばり、そのまま笑い声をあげた。

「くつくつくつ…」

痛みが全身の感覚を鋭敏にし、自らの存在を堅固な物にしていくのを感じた。

いつも財布の中に入れていた家族の写真を、今日は局の執務室に置いてきた。

戦いの舞台で、故人の写真に縋る程落ちぶれてはいないつもりだったからだ。

その代わり、妻子はきつと戦いに赴く自分を見ているに違いない。

そう思うだけで、戦うには十分だった。

不意に、防護服のポケットに入っていた通信用端末が真野に着信を知らせた。

真野は端末を取り、耳に当てる。

発信者は首相だった。

『…ただいま、閣議決定が下された』

「当然、今回の作戦を支持して下さるのですよね？」

『“人命を守る為”の作戦に関しては…な』

「…どういう事でしょうか？」

『それはこちらの台詞ではないかねえ真野くん。本日そのエリアが危険な状態に陥る事をわかっていながら何故人払いをしないのだ！』

そうら来た。と真野は思った。

「仮に本日当該のショッピングモールを臨時休業させ、付近を立ち入り禁止にするとします。そんな事をすればどうなるか…おわかりになりますでしょうか？」

『……………』

「新逆十字軍を名乗るふざけたテロリストどもは尻ごみしてその計画を断念するやもしれません。10年前東京を壊滅に追い込んだ逆十字軍と思想を同じくする連中ですよ？せっかくせん滅できる機会と環境が整ったのに、ここでそれを逃して今後どこかで東京戦を越える被害が出た場合どうなさるおつもりですか？」

『…しかし、それでは罪のない一般人の命が…』

「そんな物は二次です。テロリストのせん滅が第一の優先課題だと考えます」

一瞬、間が空いた。

その後、首相がイラついた声で閣議決定の内容を読み上げはじめる。

『……………閣議決定が出たからその内容を報告する。防衛局は作戦実行にあたり、危険が想定される地域に避難勧告・立ち入り禁止令等

万全な安全対策を行う事。そして、現場が建物の密集している都心のただ中である事を考慮し、近接武器以外の武器使用をしない事』

「“お願い”としては一応心に留めておきますが、別に私達にそれを守る義務はありませんよねえ」

『な……！真野くん……き、君は防衛局の独断活動の権利を行使するつもりかね！？』

「さようなら、首相」

真野は通話を終了した。

これでいい。

「私は、正義の味方ではない……」

真野の目的はただひとつ。

殺された妻子の仇を討つ事。

それが叶うのならば、他の人間がどうなろうと彼の知ったことではなかった。

………

………

………



「いよいよか」

超能力…もとい超脳力少年ベルはヘッドホンを頭から外しながら言った。

「それにしてもベルって、本当に天才だね。『裏の防衛省』の存在を暴いた上に、その無線通話を盗聴できるなんて」

「おだててくれても困る。首相と防衛局長の直通回線を盗聴するくらい、どんな馬鹿でも根性でいける安い仕事だ。…もっとも、足跡を残さずにやれるかどうかは人によると思うが」

言葉とは裏腹に得意げな顔で、ベルがフツと笑った。

「しかしひつでえな。ショッピングモールで戦闘になったりしたら、最悪人が死ぬんだぜ？」

龍介が髪の毛をバサバサさせながら言った。

「『裏の防衛省』だかなんだかしらないが国を守る人間がこんなじゃ世も末だぜ」

「とうかわたしは、武装した人達をモールのどこに待機させるのか気になる…かも」

「見つかったら騒ぎになるだろうしなあ…」

「いかん。もうすっかり朝になってしまった」

ベルが窓の外を見て言った。

「くっそ時間ねえぞ！ “Amber Ruby” まで電車で何時間かかる？」

すると、ベルが鍵の束を龍介に渡した。

「こ、これは…」

「向かいのマンションの駐車場だ」

見ると、沢山の車のキー…の複製と思われる物が沢山ぶらさがっていた。

「ベル…お前…」

「趣味だよ。趣味…」

ぷいとそっぽを向いた横顔が、それ以上追及するなと言っていた。

「すぐ準備するから待ってて！」

美里は言うつと、だっと部屋へ駆けて行った。

「…龍介。戦いの準備はできているのか？」

龍介の表情が曇った。

「稽古は積んだ。“能力”も健在。ただ…」

「ただ？」

「一番大事な準備が終わらないまま、奴らと戦う事になりそうだ…」

「どうせ、まだ迷っているんだろう?」

「……………」

「人間として生きるべきか否か…“能力者”と戦うべきか否か…」

『…わたしの両親だって…死んじやったじゃない!』

もう腹は決まったと思っていた。

しかし昨日の美里の言葉が、龍介の決心に揺さぶりをかけていたのだ。

確かに人間にだって醜い所はあるし、世の中腐った事ばかりだ。

ただ…それでも…

「“人間として生きる”までもない…」

龍介はゆっくりと言った。

「俺は、人間だ」

もう、迷ってなどいられない。

「……………そうか」

「お前は、どう思ってるんだ？…ベル」

「何を」

「お前は人間なのか？それとも人間じゃないのか？」

「…さあ。私にはわからない」

次の瞬間ベルが鋭い目つきで龍介に向き直った。

「ただ、本能が命じるんだ…。奴らと戦え…。と。それだけだ」

「ベル……」

各々が各々の目的、正義に則って戦いの準備を始めていた。

衝突の時は、刻一刻と迫っていく……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6614m/>

---

リバースクロス ~Got or Lost....?~

2010年10月10日14時23分発行